

## 共働きの母親における食事作りの役割意識

児島あゆみ（お茶の水女子大学大学院）

### 【背景と目的】

6歳未満の幼い子供を持つ日本の夫婦のうち、育児・家事に費やす負担は圧倒的に妻に偏っている(内閣府2020)。とりわけ母親は、家事・育児という家事役割に加え仕事役割も担い、両者の摩擦や葛藤を抱えている(内田哲郎・裊智恵 2016)。また平成28年度の総務省によると、家事の中で「食事の管理」が最も長いことが報告されている。「食事の管理」は女性の家事時間の50.0%を占めており、家事の中でも食事に関する家事への比重が高いことが示されている。

以上の背景から、共働きの母親の、食事作りに関わる時間への負担が、家事の偏りに影響していると考え、共働きの母親が、家事の一つである食事作りに関して、どのように役割として意識していくのか、どのような環境の中で担っていくのかを明らかにすることを目的として考察する。

### 【研究方法】

首都圏に住む未就学児をもつ共働きの高学歴の女性を対象として、スノーボールサンプリングによる有意抽出を行なった。調査は2020年6月21日より2020年11月30日において実施した。

事前調査票によって属性等の基本的情報を記録し、インタビューガイドを用いた半構造化インタビューを実施した。オンライン上で実施したのは10名、対面によるインタビューは2名であった。インタビュー実施時間は、約1時間から2時間であった。

### 【結果および考察】

調査の結果、調査対象者12名(正社員)のうち11名の女性が、家族の食事作りを担っていた。また12名のうち、1名が育児休暇中であり、9名が短時間勤務制度を利用し、2名がフルタイム勤務者であった。この2名のフルタイム勤務者の女性の夫のうち、1名はほぼ毎日、もう1名は週に2回以上平日も家族の食事作りをしていた。

食事作り役割の内面化として、次の過程が示された。「母親が手料理を作るべき」という規範は、周囲で示される言葉だけでなく両親の「Doing Gender」を実体験として目の前で確認し自我に取り込まれていったが、自身が母親となり「意味のある他者」の影響を受け、職場の環境も踏まえ、創発的な内省により役割取得を行っていく。その過程において、意味付けし解釈することにより「手料理を作る」ことの役割形成を行う。調査対象者の女性らは、食事作りは子どもの健康や成長と関わりがあるとして、子育てと関連して語られ、「手料理をする」という行為に対し、「よい母親らしさ」として意味付けされた「意味のあるシンボル」として意識する姿が見受けられた。そこから、「よい子育て」する「よい母親」という母親規範として、子どもに「手料理」を作ることに對して価値を認め、行為が促されるという解釈がみられた。その一方で、子どもに「手料理」を作ることの役割の意味付けを、同じく「よい子育て」として意識しているが、「よい母親」ではなく「よい親」として解釈する女性も確認された。こうした、「母として」であるのか「親として」あるのかという役割解釈の差により、夫の母親役割期待の受け取り方や夫へ働きかける態度やさらに自身の母親規範意識や母親役割意識に変化を与えていることが示唆された。また、食事作りへの育児責任意識が夫と異なるという気づきや、育児と関連させることで培われていった、食事作りへの知識や関心および責任意識が見受けられた。また実態としては、短時間勤務制度を利用している母親が平日の食事作り役割を担っており、その役割意識は合理化される可能性があることが示唆された。

報告当日は、ライフステージの移行に従ってどのように食事作りの役割意識が内面化していくのか、図を示し分析を論じる。

(キーワード：母親役割、食事作り、共働き)